

住を許さず住民の姿を見なかつたと云ふ。

以上は伊軍にとつて忘る可からざる敗戦の状況である。エ軍にとつては今日も誇りとする戦勝の記念である。第三者の觀察者にとつては六十年前と今日とは武器の性質を異にする。地形地理の峻険は今も昔も變らぬにしても、土地に關する知識と兵器とに於て非常な差異がある六十年前の戦勝が今日再び得られるとは限らないと憂ふ。この記事の掲載される頃にはエ軍には果して得意のグリラ・ウオア・ファを發揮する機會があるか否か矚目してこれ待つてゐるのである。

新著紹介

○教材解説世界新地誌（植民大陸篇）

櫻井靜著 大同館出版 定價三圓二十錢

植民大陸として濠洲・アフリカ・南北アメリカの四大大陸をのべてある、文章輕快誠に要領を得た参考書である、本書の特色は各部ごとに教授の心得をあげて注意すべき要點を漏れな

新著紹介

く記してあることである、勿論要點だから概ね二三行ではあるが、挿圖も亦簡單で効果的である。菊版四三四頁、下巻として歐亞大陸篇が出たならば、小中学校での手頃の参考書となるであらう。（藤田）

○地學寫眞

田中薰著 古今書院 定價三圓五十錢

題して地學寫眞といふが、素人たると黑人たるとを問はずいかに寫眞をとるべきかといふ機械と理論との説明である、さうして地理學者がその生きた材料としての寫眞を、天下いたる所に求むべき乗としての本書は、蓋し適切な時代への寄與といつて過言ではないであらう。四六倍版百八十二頁、説明も丁寧でわかりやすい。（藤田）

○カムチャツカ探檢旅行記

ベルグマン著 中垣虎兒郎譯 學藝社發行

昭和拾年八月 壹圓五十錢

スエーデンの自然科學者、ステン・ベルグマンの一九二〇—二二年間の探檢の内、スキー及び大樫による冬の旅行のみを記したもので、行文は外人によくあるくどい描寫もなくスラ／＼と書かれてゐる、むづかしい學名等もあり出て來ず氣樂に讀める。雪に覆はれたツンドラの景色程、單調のものは外に類もないやうに思はれるが、其處に住む土人の珍らしい風俗や樺犬・馴鹿の習性等を點描し、時々我々の憧れの火

山クルチエフスカヤも表はれ、退屈せずに終りまで讀み得た、寫眞は美しくはないけれど數多くあつて我々の想像を助けるに役立つてゐる。譯文はかつて登山の雜誌「山と溪谷」に連載されたものである。(K.K.)

○Alfred König: Die Lokalisation der oster-reichischen Papierindustrie. Wirtschafts-geographie 6. Heft Berlin u. Wien 1934.

本書は Walter Geisler, Hugo Hassinger, Karl Sapper 等八人の知名な經濟地理學者の協力の下に Bruno Dietrich の編輯により目下發行されつゝある叢書「Wirtschaftsgeographie」の中の一書である。この叢書の目的とする所は經濟地域・經濟人及び世界經濟の研究である。以下筆者は本書の紹介を簡單に行ふであらう。

彼はこの著作の目的を製紙工業の現在の地方化に對して因果的説明を與へることに置いた。併し彼は現在までの製紙工業の發展は因果的説明が問題となる限り研究されねばならぬが、それは純歴史的な論文の形態に於てなされるのではなく、寧ろこの勞作の目的は紙の生産の領域に於けるすべての事實と變化を經濟的性質のものであらうと自然的性質のものであらうとその如何を問はず與へられた地理的基礎との聯關に於て研究し、それによつてかゝる聯關が如何なる點まで現在の地方化に影響してゐるかを示すことにあると考へた。かゝる立場から彼は奧太利の製紙工業の地方化に對して考

察を加へてゐるのであるが、この勞作の本論とも云ふべき部分は三章から成つてゐる。即ち最初には現在の製紙工業の先驅者製紙場(Papiermühl)、次には製紙工業、最後に製紙工業の地方化が述べられてゐる。(Papiermühlは後には機械も使用したのであつて、Fabrik 或は Manufaktur と云ふ文字で表はされた場合もあるが、近代的な工場設備、特に製紙機械を持つ製紙工場 Papierfabrik との區別がつかぬので假に製紙場と譯した)。

製紙場に就いての敘述は樞樑を原料とする紙の生産が奧太利では何時から何處に發生し、そして如何なる發展過程を取つて如何に分布して行つたか、それを促進したものは何であつたかと云ふことで始められてゐる。次には樞樑を原料とする紙の製造工程が述べられてゐる。彼は製造工程を明かにすることによつて、或特定の空間への工業生産の地方化の地理的原因を確かめ得ると考へたのである。製造工程の分析から二つの地方化要因、即ち原料の樞樑と動力料としての水が明かにされた。この水と關係して次には奧太利に於ける起伏と水量の狀態が敘述されてゐる。かくて理論上の製紙場の立地が明かとなつたので、それと現實の地方化の狀態とを製紙場の分布圖に於て比較し、その一致してゐることを確かめてゐる。最後に彼は奧太利の樞樑を原料とする紙の製造の發展に對して經濟する人間の及ぼした影響に就いて特に一章を設けて述べてゐる。

第二章では製紙工業に關する叙述がなされてゐる。この章は製紙機械・木材を原料とする紙の製造方法等技術上の發明に關して述べた節で始つてゐる。次にはかゝる發明が在來の紙の生産に及ぼした作用に就いて論じてゐる。木材が原料として採用されて以來、樺櫟を原料として紙を生産した製紙場は運轉を殆ど休止してしまつた。それでその後ではこの新しい原料たる木材を基礎とした紙の生産が主として技術的な側面から考察されてゐる。かくて製紙工業を地方化せしめる要因の中で最も重要なのは原料、即ち木材であることが明かにされ、從つて次には木材を供給する森林に就いてその面積・分布・樹種・所有の記載が行はれてゐる。最後に彼は同じく地方化要因として重要な水と石炭に就いてその持つ意義を追究してゐる。

第三章に於ては前章に於て地方化要因の明かにされた製紙工業の地方化を論じて居り、地圖上で明かに示されてゐる如くそれが依然として樺櫟を原料とする紙の生産が占めてゐた空間と一致してゐる理由を説明してゐる。

彼は結語に於て述べてゐる如くこの研究に於ては製紙工業の空間的發展をその發生の最初から現在に至るまで明かにしようとした。彼は總括として次の如く述べてゐる。製紙場は動力料及び原料に從つて地方化した。其の後に起つた經濟的・技術的變化によつて立地の移動は惹き起されなかつたが、それは傳統によつて支配された爲ではなく、寧ろ製紙場の地方

化した空間が製紙工業の地方化要因たる森林・水力・石炭を伴つてゐたことによる。最後に最近の奧太利の製紙工業の狀態が簡単に述べられてこの書は終つてゐる。

本書は奧太利の製紙工業を地理的經濟學の立場から論じたものとする點が出來よう。その叙述が歴史的・發展적である點から見ればアルフレッド・ウェーバーの立地理論の具體的な事實に於ける展開とは考へられない。その研究對象としては一工業部門が取られてゐるが、寧ろニコラウス・ロイツブルグの立場に近いと言ふことが出來るであらう。著者は技術的な側面の變化に就いては非常に詳細に述べてゐるが、經濟組織の方面に對する分析を稍々怠つてゐる。經濟組織は勿論或程度まで自然的・技術的な狀態に並行して變化するものではあるが、その方面をもつと顧慮する必要があらうと思はれる。

併し全體として良く纏められて居り、我が國の製紙工業の地方化の研究に對しても必ず參考となる勞作であらう。

雜 報

○山西省の鑛業

端的に云へば山西全省これ石炭なりといへる。一、平孟潞澤炭區は太行山脈一帯の陽曲車山江南、山西東南邊の普域に至る地で埋藏量五百億噸、無烟炭三億噸に近い。二、汾陽炭區は汾水以西呂梁山脈の南半一帯の地で